Kurume SHIN-AI women's College

久留米信愛女学院短期大学研究紀要，第 33 号，13～20，(2010)
KURUME SHIN-AI WOMEN'S COLLEGE BULLETIN, No.33, 13～20, (2010)

『獄中記』におけるワイルドのキリスト像

阿久根　政　子

The Image of Christ in *De Profundis*

AKUNE Masako

De Profundis was a long letter written in 1897 in his narrow cell in the Reading Prison and the last of his literary achievements.

Wilde himself mentioned that this work was the most important letter in his life, and also it was what he tried to deal with his future mental attitude toward life and the development of his character.

Through his experience in the prison life, he attempted at treating of meaningful relationship his life, career, artistic ideas, failures, suffering, and ideas of Christ and martyrdom.

While in Wandsworth prison Wilde must have read the Bible many times as it was the only book available to him. Wilde's representation of Jesus in *De Profundis* is establishing his complete humanity, and the suffering Jesus but never it seems, the risen Christ.

From a humanist life of Jesus point of view, this study examines the image of Christ that Wilde described in *De Profundis*.

Key words：Suffering, Christ, Artist, Poet, Imagination
キーワード：苦難，キリスト，芸術家，詩人，想像力

Ⅰ．は　じ　め　に

この *De Profundis* の最初の前半でワイルドはアルフレド・ダグラスとの関係を扱い，ダグラスに苦痛を加えるために事の成り行きを綿密に書いている。彼の手紙の語調は，時に苦々しく，時に自己憐憫であり，ダグラスのきわめて異常で恥ずべき金銭的崩壊と倫理的退廃を責めている。しかし，絢爛たる生活から一転して，名誉，地位，自由を奪われた牢獄生活を送った彼は，「浅はかこそ最高の悪徳」とダグラスとの悲劇的交際のざんげと反省を綴り，悲哀の美しさを説き，キリスト受難の意義を論じている。獄中生活の後半では，「聖者のごときもの」であったと言われるほどに苦難を経て，人間的にも，精神的にも成長したワイルドをこの作品から読み取ることができる。

この論文において，ワイルドのこの書簡集が *De Profundis* と名付けられた経緯と，その執筆の動機と目的について明らかにし，最後に監獄生活を通してワイルドが論じる人間キリスト像を考察する。

Ⅱ．*De Profundis*　その書名について

1895年，オスカー・ワイルドはアルフレド・ダグラスとの関係で有罪となり，2年間投獄され，囚人番号 C.3.3. で呼ばれた。禁固 6 ヶ月の間，ワイルドはこのダグラスに長い手紙を書いた。獄中の囚人が自由にものを書くということは，当時の監獄では全く破格の恩典であり，これは内務省のワイルドに対する特別な思いや

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

りの措置であった。ワイルドはこの手紙の中で，ダグラスとの関係の由来を再吟味し，投獄が彼に及ぼした影響を年代順に記した。

1897年にレディングの刑務所の狭い独房の中で書かれたワイルドの手紙，*De Profundis* は彼の文学業績の最後のものとなった。この長い手紙は特別に興味深い文書である。彼はアルフレド・ダグラスとの友情とその成り行き，その本質を判断しようとしただけでなく，彼の人生，キャリア，芸術的アイディア，失敗，苦しみ，キリストと殉教との意味深い関係をもたらそうと試みたのである。ワイルドは1897年２月18日付のモア・アディーへ宛てた手紙の中で，この長い手紙 *De Profundis* を書いた目的を次のように説明している。

これは私の人生のうちで最も重要な手紙である。というのはこの手紙は，私の人生に対する未来の精神的態度と私が再び社会と交わる時の望ましい方法，私の人格の成長を論じようとするものだからである。すなわち，私が失ったもの，私が学んだこと，私が到達しなければならないことを論じようとするものだからである[1)]。

ワイルドはダグラスへのこの手紙を書き終えて，郵送の荷造りをしたが，刑務所所長の手元に差し止められたまま，結局は郵送されず，ワイルドの出獄の時に彼に手渡された。彼は出獄後，その日のパンにも困るほどに貧窮していた時でさえ，ワイルド自身この手紙を大切にし，一度も売ろうとはしなかったと言われている。このすべての原文は50年間未開封のままの状態で，英国博物館に保管されていた。

ワイルドの著作の制作者となったロバート・ロスは，ワイルドの死後５年目，1905年に，ダグラスとの関係をすべて削除し，この作品の一部を出版した。そして，ワイルドが「Epistola」－書簡－と呼んでいたこの手紙は，ロスによって *De Profundis*－深き淵より－という表題が付けられたのである。

この *De Profundis* が刊行された時，新聞は「本書が獄中で書かれたとは信じがたい」と述べ，この本はロバート・ロスがワイルドの手紙を適当に綴り合わせたものだろうとか，完全な偽作であろうとか言われたのも，囚人には執筆の自由が与えられないはずという前提に立っての議論であった。この社会一般の疑念に対して，監獄の用箋に書かれたワイルドの原稿を凸版にして「ザ・デーリー・ミラー」紙に発表し，「全原稿を確認し，それがワイルドの真蹟で疑問の余地がない」ことが証言された。初版の序文でロバート・ロスは次のように書いている。

この本は序文の必要もないし，解説の要もない。この本が私の友人ワイルドによって獄中生活の最後の数ヶ月間に書かれたものであること，獄中で彼が書いた唯一の作品であり，散文体の作品ではその最後のものであることを記せばたりる[2)]。

ところで，この霊的告白の形式は，ワイルド自身がこの手紙を書いているときに読んだ，アウグスティヌスの『告白録』－*Confessiones*－（AD.397）から浮かび上がってきたものである。アウグスティヌスが『告白録』を書いた目的は自己の罪多い過去を告白するだけでなく，自分の受けた才能，知識，神の恩恵，神の慈愛やあわれみが彼の人生にいかに意味を与えたかを伝えることであった。また，アウグスティヌスは『告白録』の中で詩編作者であるダビデ王の言葉についても述べている。

ワイルドの牢獄の手紙において，ワイルドとアウグスティヌスの関連は詩編130の中の「De Profundis」という言葉である。この言葉がロバート・ロスに動機を与え，ワイルドの手紙の書名として用いた。「De Profundis」という言葉は「主よ，深い淵から私は叫ぶ…」で始まる詩編130の最初の言葉で，ダビデ王が神に彼の罪の赦しを乞う祈りである。

ロバート・ロスは，ワイルドの書簡集のタイトルとして「De Profundis」を選び，ワイルドの文学の先駆者としてのアウグスティヌスとダビデをすえることによって，このワイルドのオリジナルな手紙には自己告白と自己弁護の不

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

一致があることを強調したのである。アウグスティヌスは自己の心理描写においても決して自己弁護や自己欺瞞に陥ることはなく，神への感謝と嘆き悲しみの中にも神への信頼を深め，神のくすしきみ業を賛美することを忘れなかった。しかし，ワイルドのダビデ的傾向が彼を分裂させた。すなわち，ワイルドは「自分を責める」という時，彼は「きみのおかげで道徳的にすっかり堕落した」とダグラスを責めている。このように，ワイルドは自己非難を受け身的な立場において自己弁護する。すなわちダグラスの欠点を並び立てて，それに屈した自分を責める，と自分を嘆き，自己弁護し，一方でダグラスを責めるところに，ワイルドの自己告白と自己弁護の不一致があるとロスは指摘している。

しかし，ワイルド，アウグスティヌス，そしてダビドの三人の共通点は弱い人間として自分の罪を認め，そこから謙虚に神に赦しを乞い，神に立ち向かう姿であり，またそれが三人に共通した偉大な姿でもある。「主よ，深い淵から叫ぶ私の声を聞いてください」という，この祈りが三人の共通の祈りであり，「De Profundis」と結びつくものである[3]。

Ⅲ. “*De Profundis*” の執筆

獄中において，ワイルドがこの長い手紙を書き始めた時期はいつなのか。どんな心理状態になった時にこれを書く気持ちになったのか。これらのことについて，獄中生活のことが入念に書かれているこの作品から考察する。

ワイルドの監獄での余りにも過酷な刑罰はかれの親しい友達にとって見るに忍びないものであったが，友人たちによる軽減嘆願の署名運動の計画もことごとく失敗に終わってしまった。しかし，監獄制度調査委員会の委員長等の陰の援助により，ワイルドに対して非常に厳しかった看守が変わり，人情味深く，温厚な紳士として知られている J.O. ネルソン少佐が任命された。このためワイルドの待遇は一変した。病気のための静養も，食事も充分に与えられるようになった。生焼けの黒パンではなく，白いパンが与えられるようになった。ワイルドはこの白いパンのことを，「神が与えてくださったマンナ」[4] のように感じ，感謝の心で錫の食器に残ったパン屑も粗末な布の上に落ちた屑も拾って食べたと記している。

ようやく，聖書以外の書物も希望通り読むことが出来るようになり，友人の訪問もしばしば許されるようになった。仕事も苦役は名ばかりとなり，指先が痛みにしびれて感じなくなるまで荒縄をほどき，血が流れ出すようなつらい槇絮（マイハダ）[5] をつくる労役は止められ，製本の仕事にまわされるようになった。彼の唯一の労働であった監房の便器の掃除を行っているのを見た看守が，英国きってのダンディー作家ワイルドに「そのつまらない仕事に屈辱を感じないのか」と尋ねられた時の気持ちを，ワイルドは *De Profundis* の中で次のように書いている。

私はありふれた獄舎の，ありふれた囚人として日を送っているという事実を率直に受け入れなければならない。…私が自分に言い聞かせなければならないことの一つは，このことを恥に思ってはならぬということである。私はそれを一つの刑罰として受け入れなければならない。

投獄されたワイルドがこのような心理状態に到達するには，一年半近くの長い月日と人間性に基づいた生活環境が必要であった。「時間」はあらゆる苦悩の最も効果ある鎮静剤でもあるとともに，次第に明るさを加えてきた生活環境が徐々に彼の憎悪や怨恨に反省や悔悟の念が現れ，ポジーに対しても憎しみの背後に愛着が，怒りの直後には憐れみが忍び寄ってくるようになり，暗黒の闇を通して救いの光がさし込んでくる時期にたどり着いた。

この時期にワイルドは，自由にものを書くという便宜が与えられ，彼の心理状態がこのように大きく転換した時に，*De Profundis*－『深い淵より』の作品が書き始められたのである。悲哀の涙に浄化された魂は，神をふり仰ぎ，また深い淵よりあえぎ求めるその愛の美しさは人

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

の子を求める究極を暗示するものがある。この作品がわれわれの心に訴えるのは，人間の弱さも強さもぶちまけて綴った記録だからであろう。そして，この記録は書くべき人によって，書かれるべき場所において，書かれるべき時に書かれた人間記録というべきものである。

Ⅳ．ワイルドのキリスト像

監獄生活の前半の頃，ワイルドの心は荒れすさみ，自殺をも望んだほどの苦しみの中で，親しい友達，やさしい家族，妻に支えられ，一冊の聖書を心の糧としながら監獄生活を送っていた。こうした生活の中でも，ワイルドはたとえどんなことがあろうとも心の中に愛を持ち続けなければならないと考えていたのである。そして，自分のうちに起こったすべてのことを，自分にとって良きものとしなければならないと心に決めていた。木のベット，粗末な食べ物，荒縄をほどき槇絮（まいはだ）を作る労役，日々の賤しい仕事，悲しみをいかにも醜いものと見せてしまうぞっとするような衣服，沈黙，孤独，羞恥－これらのひとつひとつを，またすべてを，かれの霊的な体験に変形するように心がけたのである。このような厳しい監獄生活の体験を通して生まれ出た，ワイルドのキリスト像，人間キリストを考察してみたいと思う。

ワイルドはこの作品の中で，人間キリストとしてのキリスト像をつぶさに述べている。彼がキリストについて論じる時，救い主なるキリストに対する彼の説明は，一般的な神学的，聖書的説明とは異なり，復活のキリストではなく，人間キリストとしての観点からキリストを論じている。

Stehen Arata はワイルドのイエスについての描写に関して，「*De Profundis* の中で，ワイルドはイエスについての描写を極端な神秘主義ではなく，イエスの完全な人間性をうち立て，キリストの付随する神性に対してはいかなる主張も全く退け，新約聖書の非神話化作家である Ernest Renan や David Struss のように，『全くの現世のキリスト』を生み出している」[6] と述べている。従ってワイルドの描くキリストは苦しむイエスであって，復活のキリストではないのが特徴的である。これは残酷で非人間的な監獄でのワイルドの生活体験と神化されないイエスとの間に深い関連があるように思われる。

聖書は Wandsworth の監獄にいる間，彼に許された唯一の本であったことはさきに述べたとおりである。彼にとって，監獄での聖書の出会いは，以前の聖書との出会いとは全く異なっていたということは言うまでもない。すなわち，監獄での最初の年，彼は強い自殺願望を持ち，釈放やより多くの書物の要求のために哀れなアピールや嘆願を行った一年であった。こうした精神錯乱から，ワイルドを救ったのはこの時に与えられた唯一の本，聖書であった。監獄生活の陳腐と付随する危険，ベッド，床，槇絮（まいはだ）ほぐし等の生活の重要な事実をワイルドに強いて執着させたのは，以前彼が持っていなかった聖書的写実主義の影響である。現実を直視することは，監獄の手紙を支配するスタイルであり，イエスの描写と重なる点である。

こうしたワイルドの体験を通して読んだ聖書の中でのイエスとの出会いから，まずはじめに「芸術家としてのキリスト」を挙げている。ワイルドは「人生における浪漫運動の先駆者」としてキリストを描き，キリストの真の生活と芸術家の真の生活との間に非常に緊密で直接的なつながりと，個性と全一性との密接な結合をキリストのうちに認めている。そればかりでなく，キリストの資質の根底そのものは，芸術家の根底と同じものであり，それは想像力であると断言している。キリストは芸術の領域においては，創作の唯一の秘密である想像力による共感を，さまざまな人間関係のあらゆる領域にわたって体現した。すなわち，癩者の癩を，目の見えない人の闇を，快楽のために生きる者の恐ろしい惨めさを，高ぶる者の異様な貧しさを理解した。このように，ワイルドはキリストを芸術家の資質と生活における密接なつながりを述べ，キリストを芸術家としてみなしたのである。

次に，キリストを詩人として扱っている。キリストの場所はまさに詩人とともにある。そし

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

て，キリストの人間観はまさしく想像力からわき出たものであり，想像力によってのみ実感されるものである。共感という神秘な力によって，神と人とのそれぞれが自分のなかに体現されていることをキリストは感じ取り，自らを神の子と呼び，人の子と呼んだ。そして，キリストはわれわれのうちに驚異の感情を呼び覚ます。キリストこそ分かたれた神と人とを一つに結び合わされた者として考えられる最初の人であり，この名もない大工の若者が全世界の人々の罪や重荷を一人で負いうるものと夢見たほど，信じがたいことを彼が実現した。そして，人々は今日でもキリストの人格に接することによって，罪が拭い去られるのである。キリストの驚くべき全生涯もまたもっとも素晴らしい詩であり，「憐憫と恐怖」の点においてキリストの生涯に及ぶものはないと述べている。キリストの受難の場面について，「キリストの受難はこのうえなく素朴な哀感と悲劇的効果をもった崇高さとがむすばれ，ひとつのものになっている点で匹敵しうるのも，また，そこまで近づきうるものはなく」，「このキリストの受難の場面がその精神と共に，今日も教会のミサの中に存続されていることに歓びと畏敬の念を表している」と，キリストの受難とミサの関係にも触れ，特にキリストの最後の晩餐から埋葬までをわずか30行足らずで描写している個所は見事なものである。

The little supper with his companions, one of whom had already sold him for a price: the anguish in the quiet moonlit olive-garden: the false friend coming close to him so as to betray him with a kiss: the friend who still believed in him and on whom as on a rock he had hoped to build a House of Refuge for Man denying him as the bird cried to the dawn: his own utter loneliness, his submission, his acceptance of everything: and along with it all such scenes as the high priest of Orthodoxy rending his raiment in wrath, and the Magistrate of Civil Justice calling for water in the vain hope of cleansing himself of that stain of innocent blood that makes him the scarlet figure of History: the coronation-ceremony of Sorrow, one of the most wonderful things in the whole of recorded time: the crucifixion of the Innocent One before the eyes of his mother and of the disciple whom he loved: the soldiers gambling and throwing dice for his clothes: the terrible death by which he gave the world its most eternal symbol: and his final burial in the tomb of the rich man, his body swathed in Egyptian linen with costly spices and perfumes as though he had been a King's son….[7)]

「弟子たちとともにしたささやかな晩さん－その弟子のひとりはすでに金でキリストを売っているのだが－静かな月光の庭の苦悩，接吻でキリストを敵に知らせようと身をよせてくる偽りの友」と，＜主の晩餐＞＜ゲッセマネで祈るキリスト＞＜ユダの裏切り＞（マタイ福音書26章14節～50節）の場面を描き，「なおもキリストを信じ，キリストもまた彼を磐とみなして，その上に人間の避難所である教会を築きたいと念じていたにもかかわらず，にわとりが暁を告げたとき，われ，かの人を知らずと答えて，キリストを否んだ友」と，＜弟子ペトロ＞との関係を表し（ルカ福音書22章54節～62節），また，＜ピラトの尋問，死刑の判決，十字架につけられる＞（マタイ福音書27節11～56節）までの事柄を「キリスト自身のこのうえない孤独感，忍従，あらゆるものを受納する心，その他さまざまな場面がある」とキリストの苦しみの心を簡潔に述べている。イエスが＜神を冒涜した＞と言って，「激怒してキリストの衣を引き裂く正教派の大司祭」カイアファの態度（マタイ福音書26章65節）と，「自分を歴史上の大悪人としたかの『罪なき人』の血のしみを，自分の身から洗い去ろうと空しく願って水を求める大守」，ローマ政府から派遣されていたユダヤの総督，

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

ポンシオ・ピラトの責任逃れの態度（マタイ福音書27章24節），「有史以来もっとも驚くべきもののひとつであるかの悲しみの戴冠式」として＜茨の冠＞をかぶせられ，兵士達から侮辱される場面を表現している。「その母とその愛する弟子の面前の『罪なき人』の磔刑」（ヨハネ福音書19章25節～26節），「その衣を賭けて賽を振る兵士達」（ルカ福音書23章34節），死のもっとも永遠なる象徴として，かれが世界に示した恐ろしき死，あたかも王の子であるかのように，「その屍は高貴な香料」（ルカ福音書23章55節）とともに，「エジプトの亜麻布」（ルカ福音書23章53節）につつまれて，「富者の墓に横たえる最後の埋葬」（ルカ福音書23章50節～56節）とキリストの受難と死を描いている[8)]。

これらのすべてのことを芸術的見地から眺めるとき，教会のもっとも重要な職務が，この悲劇を流血の惨事なしに演じてみせること，すなわち，対話と衣装と身振りによる主の受難の神秘的な表現であることに感謝し，いまは芸術から消え失せてしまったギリシアのコーラスの最後に残った形が，ミサの時に司祭に応答する侍者役のうちに見いだされることに，歓びの心と畏敬の念とが湧き上がってくるとワイルドはキリスト受難の意義とミサを結びつけて説明し，ミサの中に残されている芸術的な測面を賞賛している。

しかし，死者から復活したイエスの物語は全く書かれていないが，「鈍感で想像力のない」人々を活気づけるために，イエスの能力の比喩的な表現として，ワイルドはパンの奇跡（マルコ福音書６章30節～44節）を挙げている。五千人の人に食べさせることは，美しい言葉を通してよりもむしろ，パンと魚の増加という奇跡を通して成就された。すなわち，丘の上のイエスの声は群衆に彼等の飢えや乾きや世の心配事を忘れさせた。一方，カナで彼に出会い，「水は良いぶどう酒の味がした」（ヨハネ福音書２章10節）というカナでの彼の会話に耳を傾けた人々もいる。ここでワイルドはカトリック的でない考え方を追求している。すなわち，パンやぶどう酒のような実体的でない経験主義的なものの変化は全く不可能なことであると解しているのである。

次に，このような悲哀と美とが完全にひとつになりうることを示しているキリストの全生涯はどうかと問えば，それは「牧歌」であるとワイルドは言う。若き花婿のことを考え，また羊をつれて緑の牧場や清冽な流れを求めてさまよう羊飼い，あるいは大いなる愛し手を思い浮かべる。そして，キリストの奇跡は「春の訪れ」のように自然な形で行われているとワイルドは語る。

キリストの全生涯が牧歌であるというワイルドは「キリストの人柄」は実に魅力に富んだ人だと述べている。それ故に，キリストにただ会うだけで悩める魂は平和をもたらされ，キリストの衣に手を触れた者は苦痛を忘れる。キリストが近づくと邪悪な情念は去り，山上に立って教えれば，群衆は飢えと乾きと，この世の煩いを忘れ，水は芳醇なぶどう酒の味となる。かれはキリストのまなざし，キリストの行動，キリストの教え，キリストの奇跡，それらすべては魅力に富んだキリストの人柄から放たれるものとして扱っている。

魅力に富んだ人であるキリストの驚くべき生涯は以上のように一編の詩であり，牧歌であると同時に，キリストの生涯がひとつの芸術であり，彼自らが一個の芸術家であったということを前提として，その芸術家たる要素はキリストが最も強い個性を持った個人主義者だった点だとし，「キリストは個人主義者」の優なるもの，至高の個人主義者，史上最初の個人主義者だったと考えている。そしてキリストがつねに探し求めているものは人間の魂であり，キリストは人間の魂を「神の国」と呼び，すべての人の中にその「神の国」を見出している。さらにキリストは人間の魂を，ささやかなもの，小さな種，一握りのパン種，一粒の真珠になぞらえている。

同様に，キリストは貧しいもの，牢獄に閉じこめられているもの，賤しいもの，惨めなものを憐れみ，それにもましてキリストは富めるもの，強情な享楽主義者，自由を投げ捨てて物の

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

奴隷となるもの，柔らかな衣をまとい王者の家に暮らすものに向かい，はるかに多くの憐れみをよせる。なぜなら，富や快楽は貧困や悲哀よりも，じつにはるかな大きな悲劇であるとキリストは感じられたからだとワイルドは考えている。

次にワイルドは「悲しめる人の像」としてキリストを述べている。キリストは従来考えられていたような博愛主義者ではなく，他人の生命をキリスト自身の生命との間には何の相違もないとワイルドは指摘している。彼によると，芸術家にとって表現のみが人生を認識しうる唯一の途であり，もの言わぬことは死を意味する。しかし，キリストにおいては，広大な驚くべき想像力をもって，キリストは唖者の全世界を，声のない苦痛の世界を自らの王国とし，キリスト自身を永遠の代弁者とした。「その沈黙はただ神の耳にのみ届く」とし，その人々をキリストは自分の兄弟として選んだ。キリストは目の見えない人の目となり，耳の聞こえない人の耳となり，舌を縛られた者の口中の叫びになろうとした。ことばを出すすべを知らぬ万人のために，彼が天に叫びかけるラッパとなる。これがキリストの願いであったこと，そしてキリストは苦悩と悲哀を通して美の観念をつかみうる芸術的な天稟を抱き，観念を具現化し，形象とするために自らを「悲しめる人の像」とした。このようにすることによって，キリストは芸術を魅了し支配していたと，ワイルドは説いている。

さらに，ワイルドはキリストをイザヤ書の預言の成就なるキリスト，人間キリストとして次のように言い表している。「生命そのものは，もっとも賤しい世界から... 賛嘆すべきものを生んだ。ナザレの大工の仕事場から... このうえもなく偉大なひとりの人間，ぶどう酒の神秘な意味と野の百合のまことの美とをこの世にむかって啓示すべく，いかにも奇異なまでに運命づけられたひとりの人間が現れた。『かれは軽蔑され，人々に見捨てられ多くの痛みを負い，病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し，わたしたちは彼を軽蔑し，無視していた』（イザヤ書53章３節）というイザヤの歌はキリストには自分のことを預言するかのように思われた。そしてこの預言はキリストのうちにおいて成就したのだ。」そして，イザヤやエゼキエルの預言は世に「待たれていた」キリストのなかに具現化されたのだといっている。

そして，内面的感情や創造的個性の重要性を主張するロマン派の芸術の中にキリストが，キリストの魂が存在する。すなわち，シェクスピアの『ロミオとジュリエット』・『冬の夜ばなし』，コールリッジの『老水夫行』，チャタトンの『慈悲の歌』の中にキリストの存在を認め，ユーゴーの『レ・ミゼラブル』，ボードレールの『悪の華』，バーン・ジョーンズとモリスの色ガラスやつづれ織り，イタリア・ルネッサンス風の芸術作品などはすべてキリストに属するものであり，このようにキリストのロマンスの脈々たる鼓動の中心とするものは，キリスト自身の天性の想像的な素質にほかならないのである。ナザレのイエスは，もっぱらキリスト自らの想像力からかれ自らを創り出したのだと，ワイルドは述べ，キリストは芸術家として魅力があることを強調している。

キリストのうちには生命を彩るあらゆる要素が，すなわち神秘が，奇異，哀感，暗示が忘我の境地がそして愛がある。キリストは驚異の念に訴え，かつその状態を創造する。人はただこれを通してのみキリストを理解することができる。そして，キリストが成し遂げた大いなること，それは「愛」であるとワイルドは確信している。すなわち，キリストは「あらゆる愛し手の第一人者」であり，愛こそ，賢きひとびとが探し求めていたこの世の第一の秘密である。愛によってのみ，ひとは癩者の心に近づくこともでき，神のみもとに近づくこともできると知っていたキリストは，愛の人であったと強調している。

ワイルドはまた，かれの名声，地位，幸福，自由，富，子どもまでも完全にすべてを失ったとき，彼にとってなすべきことは「すべてを受け入れること」と悟り，すべての物を失ってはじめて，キリストの言う「幼子のような純粋なもの」となることを知った。それ以来ワイルド

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

は以前よりしあわせになったと記している。

以上のように，キリストを人生における浪漫運動の先駆者として描き，芸術家とキリストの根底にある想像力による共感を人間関係のあらゆる領域にわたって，具体的に表現し，キリストには芸術家の資質と生活における密接なつながりがあると述べ，キリストを芸術家であり詩人であると見なしている。またキリストの驚くべき全生涯はもっとも素晴らしい詩であり，牧歌であり，キリストの奇跡は「春の訪れ」のように自然な形で行われていると説いている。キリストのまなざし，行動，教え，奇跡，これらすべてはキリストの人柄から放たれるのもで，キリストは魅力に富んだ人であると同時に，キリストは驚くべき想像力をもって，目の見えない人の世界，耳の聞こえない人の世界，言葉を出すすべを知らない人の世界，これらの苦痛の世界をすべて，彼自らの王国とし，苦悩と悲哀を通して美の観念をつかむ芸術的な才能をもって，観念を具現化するために自らを「悲しめる人の像」とし，なによりも「想像力はただ愛の現れ」というワイルドにとって，キリストは「愛の人」であったと結論づけている。

［注］

1）Donald H. Erickson: Oscar Wilde, TWAYNE PUBLISHERS, p.154, 1977

2）オスカー・ワイルド：獄中記（De Profundis），新潮文庫，p.3，1982

3）Jarlath Killeen: The Faith of Oscar Wilde, palgrave Macmillan, p.168-169, 2005

4）出エジプト記16章15節－16節

5）槇絮（まいはだ）＜oakum＞
漏水を防ぐために船材の隙間に詰めるほぐした古なわ.

6）3）と同じ p.164-166

7）Oscar Wilde: The Complete of OSCAR WILDE, (J.B. Foreman), Collins, p.924, 1983

8）2）と同じ p.120

参　考　文　献

Robert Keith Miller: Oscar Wilde, Frederick Ungar Publishing Co. 1982

鈴木ふさ子：オスカー・ワイルドの曖昧性，開文社，2005

平井　博：オスカー・ワイルドの生涯，松柏社，1960

オスカー・ワイルド：キリスト教文学の世界Ⅱ－ワイルド　スパークー，主婦の友社，1977

聖書：新共同訳，日本聖書協会，1988

（2010年３月20日受稿）

NII-Electronic Library Service